結幼稚園　園だより

つくし

令和６年１月９日

新潟市立結幼稚園

新しい年を迎えて

園長　北村　　宏

２０２４年は本当にたいへんなスタートとなりました。１日の夕方に発生した能登半島地震において、被災された皆様に心からお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復旧、回復をお祈りいたします。

昨年は、５月に新型コロナウィルスによる感染症の位置づけが変わったことで、様々な活動の制限がなくなりました。幼稚園でも９月の運動会では、たくさんの方から、参加・参観していただくことができました。おうちの方と一緒に走ったり、踊ったりできたことは、子どもたちにとって、コロナ禍ではなかなかできなかった、かけがえのない思い出となったことと思います。

さて、そんな中、私にとって、幼稚園の大きな変化を感じる出来事がありました。

一つ目は、市立幼稚園で満三歳児保育が始まったことです。９月の受入開始から今年の３月までに８名のお子さんが新たに入園することになっています。

結幼稚園では、クラスを越えた異年齢交流を日常的に行っていましたが、満三歳児保育の開始により、一つのクラスの中に発達段階の異なるお子さんがいることから、これまで行ってきた保育の見直しやより柔軟な対応が必要となり、今まで以上に一人一人を大切にした保育を心がけるようにしています。

二つめは、幼稚園・保育園・こども園と小学校をつなぐ架け橋プログラムへの推進です。これまでも、園で行うアプローチカリキュラム、小学校で行うスタートカリキュラムなど、園と学校をスムーズに接続するための取組が行われてきましたが、それぞれの取組が十分共有されていなかったのではないかと感じることがありました。

１１月に新潟市立図書館ほんぽーとで開かれた「幼児教育シンポジウム（新潟市教育委員会主催）」では、市民に混じって、小学校教員の方も参加されていました。幼児教育の実態とその重要性が熱く語られるとともに、その学びをいかに学校教育につなげていくか、意見交換がなされました。

結幼稚園でも、小学校との情報交換会では、近隣の保育園・こども園の方々からも参加していただき、各園での取組、小学校での取組を紹介しあい、意見交換を行いました。園と学校が別々に取り組むのではなく、目標や課題を共有して取り組んでいくことの必要性を改めて確認することができました。

さくら組の学習発表会で、スマートフォンをかざし、「ピッ、ピッ」と決済する子どもたちの姿を見たとき、おうちの方の姿をよく見ているのだと感心させられたり微笑ましく思ったりしました。しかし同時に、子どもたちはこういう時代を生きてゆくのだと強く実感させられました。家に備え付けの電話があり、財布を持っていなくては買い物ができなかったのは、すでに過去の話なのです。

これからの時代を生きる子どもたちは、ＡＩ等の高度な情報化、少子高齢化、グローバル化…これまで私たち大人が経験したことのない時代を生きていくことになります。一人では解決できない課題も、まわりの人間と協働して解決していくたくましさが求められています。

私は、そのたくましさを支える基盤は「自分にはよいところがある」「自分は誰かの役に立てる」「自分も相手も、誰もがかけがえのない存在である」などの自己肯定感、自己有用感といった正しい自尊感情であると思っています。一人一人が大切にされていると実感し、生き生きと活動できる結幼稚園を目指して、職員一同努めてまいります。本年も保護者の皆様、地域の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。